第四章　古墳時代

第一節　古墳時代の概要

古墳時代は、土を盛り上げて造成された墳墓である「古墳」が日本列島の各地で盛んに造られる時代である。便宜上、前期・中期・後期（終末期を加えることもある）と区分される。

古墳は前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳を基本の形とし、前方後円墳を上位として、大きさと形である程度埋葬される人の地位がランク付けがされると考えられる。古墳は単なる墓としてではなく、目に見える権威の象徴でもある。また、近年の研究では、海沿いや川沿いなどから視認できる古墳はランドマークとして、遠方から人々に見えるような機能を持たせたものも存在するとの見解もあり、古墳が築造される背景は一元的ではないと考えられる。

前期（三世紀中ごろから四世紀）

前期は、卑弥呼の墓と考えられる全長約二八〇mの箸墓古墳（奈良県桜井市、写真4-1）を代表とする古墳が築造され始め、本格的に日本列島で古墳が造られ始めていく時期である。

この時期の古墳の埋葬施設は、竪穴式石槨と呼ばれ、古墳の頂上に竪穴を掘り、石を積み上げ石槨を造り、遺骸を納める（図4-1）。加えて、副葬品は三角縁神獣鏡などを始めとした鏡や勾玉などの玉類、剣、鏃といったものが主体となっており、これらは威信材として副葬されたと考えられる。また、古墳の被葬者はその地域の政治・宗教的な盟主であったのではないかと考えられる。

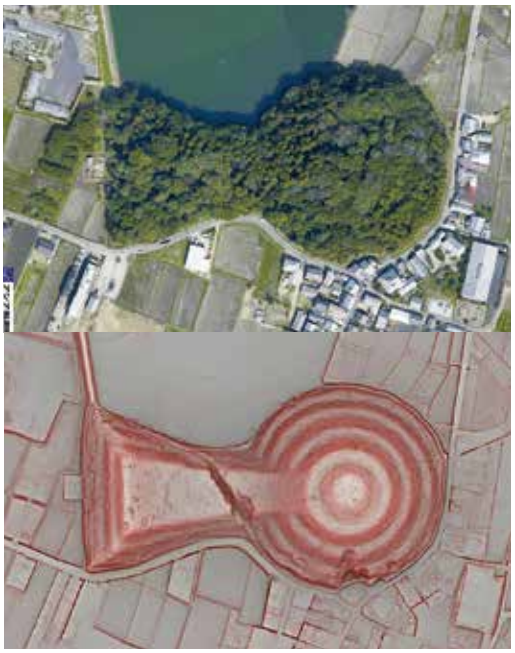


写真 4-1　箸墓古墳（奈良県桜井市）全景写真および赤色立体図（奈良県立橿原考古学研究所・アジア航測株式会社提供）

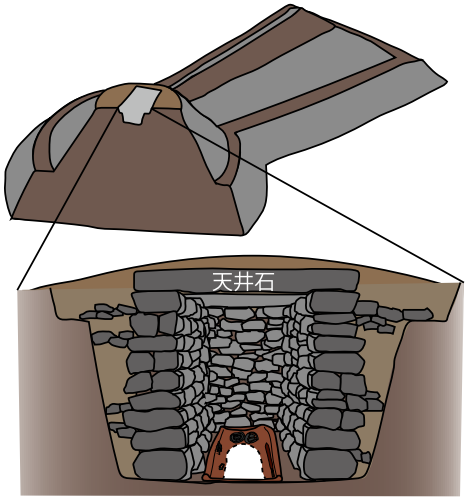


図 4-1　竪穴式石槨断面模式図
古墳の頂上（墳頂）から掘りこまれ、石を積み上げ遺骸を埋葬する場所を作り、天井石で閉鎖し、土などで被覆する。遺骸は ◯ 部に木棺などが置かれ、埋葬される。棺内、棺外にはさまざまな副葬品が供えられる。

埴輪もこの時期から出現し始め、壺型埴輪や円筒埴輪が古墳に並べ立てられるようになる。人物や動物、建物などの形象埴輪は次の中期に登場する埴輪群である。

また、前方後円墳などの古墳が各地へと拡散する事象は政治的ネットワークの拡張であるとも考えられ、中期におけるクニの萌芽期につながる段階と評価できる。

中期（五世紀ごろ）

中期は、古墳時代の最盛期を迎える時期で巨大な前方後円墳などの古墳が築造されるようになる。代表的な古墳としては、全長約五〇〇m近くにも及ぶ大阪府の大仙陵古墳（写真4-2）をはじめとする百舌鳥・古市古墳群などがあげられる。近畿地域は非常に大型の古墳が多く築造され、政治的統合を担う中心的勢力が存在したと考えられる。

この時期、埋葬施設は竪穴式石槨がいまだに主流となっているが、横穴式石室への変化の過渡期段階の時期でもある。横穴式石室は前期の末ごろ（四世紀末ごろ）には、北部九州ですでに導入されており、日本列島の一部地域でも導入が始まってくる。

中期は技術や文化の革新期としても評価できる。まず、須恵器の登場である。須恵器は青灰色をした硬質の土器であり、従来の野焼きに近い製法で製作された土器とは異なり穴窯で焼かれる土器である。この時期の須恵器は近畿地域を中心として製作され、生産体制の専門化を物語っている。また、甲冑のほか、馬具もこの時期に副葬品として加わる。馬具の登場から、騎馬文化がこの時期に伝来したと考えられ、画期として重要である。

須恵器や馬具の登場は朝鮮半島からの技術流入であり、新たな技術と文化の登場は朝鮮半島との活発な交流を示唆している。

写真 4-2　大仙陵古墳（大阪府堺市）全景（堺市提供）

墳丘長は 486m、高さ 34.8m を測る日本最大の前方後円墳である。江戸時代の地誌『全堺詳誌』では、後円部に埋葬施設があり、長さ 3.18m、幅 1.67m の石棺が用いられているとされ、日本最大の石棺である。

写真 4-3　保渡田八幡塚古墳（群馬県高崎市）全景
写真 4-4　埴輪群（復元）
（かみつけの里博物館提供）

また、この時期は埴輪にも変化があり、人物や動物、家などを模した形象埴輪が出現する。代表例として、群馬県の保渡田八幡塚古墳があげられる（写真4-3・4）。この古墳には、男性の武人や巫女のほか、馬や犬などさまざまな形象埴輪が配置されている。これらの形象埴輪は、儀礼の再現をしていると考えられる。このほかに、三重県の宝塚古墳には全長約一四〇cmの船形埴輪などもあり、これは被葬者の魂を乗せる葬送船と考えられる。

このほか、近畿地域の勢力拡大をうかがえるものがある。埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣（写真4-5）や熊本県の江田船山古墳の鉄剣に施された銘文には、「獲加多支鹵大王（ワカタケル大王）（雄略天皇）」の文字が刻まれており、近畿地域の中心的勢力の拡大や地域との結びつきがうかがえる。

このように、各地の有力者と近畿地域における中心的勢力との政治的な協力もしくは統合が考えられることから、この時期は単なる地域的な発展ではなく、列島規模の政治的統合が始まり、クニの萌芽期として位置づけられる。

後期～終末期（六世紀～七世紀末ごろ）

後期に入ると、古墳の規模は縮小傾向になっていくが、前期末～中期の段階で限定的に導入されていた横穴式石室は、全国に普及していく。従来の竪穴式石槨は一人のみの埋葬（単葬）であったのに対し、横穴式石室は後から複数回の埋葬（追葬）が可能となり一族単位での埋葬が可能となった（図4-2）。これは、被葬者層の広がりを意味する。

後期における古墳の代表例としては、大阪府の今城塚古墳があげられる。周溝を含めると全長約三五〇mにも及び、後期においては

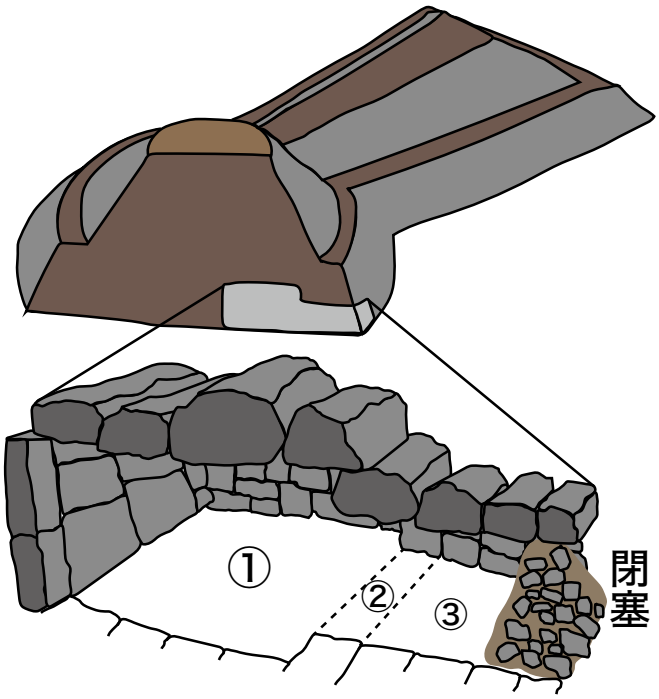


図 4-2　横穴式石室断面模式図

横穴式石室は、古墳の側面からトンネル状になっている構造上、数度の埋葬（追葬）が可能となっている。
遺骸は①の玄室に石棺や直に納められ、周りにさまざまな副葬品が供えられる。②は玄門と呼ばれ、玄室の入り口にあたる。③は羨道と呼ばれ、玄門に至る通路である。
閉塞は土や石などが用いられ、追葬の際に崩される。

銘には「ヲワケ（コ）」という人物の先祖が大王に代々仕えてきたことや「ヲワケ（コ）」がワカタケル大王の補佐をし、その功績を記録するため「辛亥の年」に鉄剣を造らせたと記される。

写真 4-5　稲荷山古墳出土鉄剣（国〈文化庁保管〉、埼玉県立さきたま史跡の博物館提供）

非常に巨大な古墳である。多くの埴輪が建て並べられており、武人埴輪や巫女埴輪などの中期から続いている形象埴輪群が確認されている。横穴式石室はすでに破壊されているが、石室の全長は約一〇m～一三mと推定されており、内部から発見された石棺の破片などからも大王の古墳として継体天皇の墓と推定されている。

また、横穴式石室は、日本列島各地に広がりを見せ、地域色のある多様な形態の横穴式石室が展開していく（写真4-6・7）。

この時期は、直径一〇mほどの小型の円墳を集中して築造する群集墳が登場する。群集墳は、小規模な古墳が一つの丘陵などに密集して多数築造されたものである。これらは、地域の豪族などが築いたと考えられる。このような事象は古墳に埋葬される人、ひいては埋葬するための儀礼などが広く浸透した結果ともいえる。

群集墳のほかにこの時期は、崖などに横穴を作り、埋葬施設とする横穴墓といったものも増加してくる。

七世紀ごろの終末期段階には、奈良県明日香村の石舞台古墳（写真4-8）や岩屋山古墳を代表とする巨石を用いた巨大な石室が支配者層に採用される。一方で、群集墳はその数を減らし最終的には消滅に至る。七世紀後半になると大化の改新による「薄葬令」の影響により、支配者層の石室規模も縮小し、横口式石槨が採用されるようになる。また、明日香村の高松塚古墳やキトラ古墳（図4-3）もこの時期の古墳で、壁面の絵画は風水思想や四神思想の流入を想定できる重要な古墳である。

終末期は寺院の建立と古墳の築造が平行する段階であり、徐々に寺院の造営へと移行する。さらに火葬の風習が広がることで古墳を築く文化は終焉を迎え、仏教中心の時代へと変化し、奈良平安時代を迎えることとなる。

写真 4-8　石舞台古墳（奈良県明日香村）石室全景および内部（明日香村教育委員会提供）

写真 4-6　天王塚古墳（和歌山市）オルソ画像石室断面（和歌山県立紀伊風土記の丘提供）

図 4-3　キトラ古墳（奈良県明日香村）石槨内壁画展開図（奈良文化財研究所提供）

写真 4-7　王塚古墳（福岡県桂川町）石室内（復元、王塚装飾古墳館提供）

第二節　東海東部地域の古墳時代

東海東部地域（ここでは愛知県東部～静岡県とする）において、最も早く築造される古墳は静岡県東部の高尾山古墳である。高尾山古墳は沼津市に所在する前方後方墳であり、全長は周溝を含めると約八〇ｍになる。埋蔵施設は、竪穴に木棺を直に埋納してあり、鏡・剣・勾玉のほか、多数の鏃や木工具の槍鉋など多くの副葬品が出土している（写真４-９）。築造時期は三世紀前半ごろの可能性が高く、箸墓古墳とほぼ同時期の築造であり、東日本では最古級の古墳となっている。

駿河地域や遠江の一部は早い段階で古墳が築造される。西遠江や三河地域は高尾山古墳にやや遅れて古墳が築造されるが、その多くが前方後方墳である。東海地域は前方後方墳の築造を皮切りに、後に前方後円墳が築造される傾向にあり、近畿地域とは様相が異なっている。

次第に古墳の築造は活発になり、三河地域や遠江地域では、大型の前方後円墳や円墳が数多く築造されていく。代表的なものとして松林山古墳（磐田市）などがあげられる。駿河地域については浅間古墳（富士市）や向山一六号墳（三島市）など前方後円墳と前方後方墳がともに築造されており、地域色があらわれている。

古墳時代最盛期の中期において、三河地域や遠江地域でも大型の古墳が活発に築造されていく。磐田市では、堂山古墳（写真４-10）など大型の古墳が活発に築造され、愛知県東部でも正法寺古墳などの埴輪を備えた大型の古墳が築造される。

一方で、静岡県東部では特異な状況が読み取れる。静岡市から伊豆の国市付近などの地域では、古墳の築造が極めて低調になるという点である。この背景には富士山の噴火活動が大きく影響していると考えられる。大淵スコリアと呼ばれる富士山の噴出物について、

写真 4-10　堂山古墳および出土埴輪（磐田市提供）

写真 4-9　高尾山古墳および埋葬施設、出土遺物（沼津市提供）

近年の研究では古墳時代中期に降下したものがあると分かっている。特に富士市周辺では大淵スコリアの降下状況が明瞭であり、宮添遺跡のように廃絶して間もない住居からスコリアが積もった状況が確認できるものもある（図4-4、写真4-11）。

このように駿河地域では古墳時代中期に富士山の噴火災害があったと考えられ、人が住むには困難な環境が続いた可能性がある。このため周辺地域の首長層は勢力を維持することが困難となり、古墳の築造が低迷したと考えられる。

しかし、中期の終わりから後期ごろになると、古墳の築造が再開し始める。富士市の伊勢塚古墳や伊豆の国市の多田大塚四、六号墳はその代表格で形象埴輪を含む埴輪群や甲冑、鉄剣などの金属製品も多く、近畿地域の影響下にある新しい首長たちの台頭と彼らを起点とした地域支配が垣間見える。

後期の前半期は、噴火災害から復興した駿河地域を含めた東海東部地域では規模が縮小するものの、前方後円墳や円墳が多く築造され、横穴式石室や竈・須恵器・馬具などの新来の文物も定着していく。後半期は、前方後円墳や大型の円墳が継続して築造される。静岡市の賤機山古墳は畿内地域に特徴的な石室と家形石棺を備え、きらびやかな武具や馬具などが副葬され、近畿地域中枢との関係の近さがうかがえる。しかし、終末期に入ると前方後円墳の築造は終焉を迎え、群集墳や横穴墓も数多く築造され、富士市の伝法古墳群や伊豆の国市の北江間横穴群などが代表例としてあげられる。

終末期の後半ともなると、富士市の東平一号墳などの一部古墳が残るが、東海東部の大半で古墳が終焉を迎え、静岡市の尾羽廃寺など寺院が造営されるようになり、八世紀を迎えるころには古墳の築造はほとんど見られなくなる。

写真 4-12　賤機山古墳全景・石室・出土遺物（静岡市提供）

図 4-4　宮添遺跡の住居（富士市提供）

写真 4-11　宮添遺跡の住居（富士市提供）
白色部が大淵スコリアの堆積。

第三節　富士宮市の古墳時代前期

新たな集落の誕生

本節では遺跡の立地などから、古墳時代前期における生業や社会の動きを推察していく。

弥生時代後期に星山丘陵上に栄えた大集落である月の輪上遺跡では、竪穴建物跡二七軒に対し掘立柱建物跡が七軒あり、集落内には住居のほか、掘立柱の祭殿や倉庫などが集約されていたと考えられる。ところが、それより西に位置する月の輪平遺跡（写真4-13、図4-5）では竪穴建物跡一一七軒に対し、掘立柱建物が二軒とその比率が急激に低下している。三世紀ごろに登場した月の輪平遺跡は、竪穴建物跡や掘立柱建物跡のほか、小型の竪穴遺構や小穴、そのほかに機能が不明な遺構二基を検出している大規模な集落遺跡である。この集落では、二度の火災を被った痕跡が確認されており、最終期の火災の後、集落の造営が停止するに至っている。

遺物は甕や壺類、高坏などの土器類のほか、ガラス玉や銅鏃・鉄鏃・刀子の金属製品、砥石など多岐にわたって出土している。

これに加えて、月の輪平遺跡よりも一段下がった河岸段丘上に形成された月の輪下遺跡（図4-6）があげられる。

この遺跡では、竪穴建物跡が四軒、集石遺構が一一基、不定形の円形土坑が一基検出されている。ここで検出されている竪穴建物はいずれも六本の柱穴を有しており、隣接している月の輪平遺跡で検出している建物とは構造上大きな違いが見受けられる。加えて、検出されている集石遺構は建物の廃絶後、内部に築かれているものや

写真 4-13　月の輪平遺跡出土土器

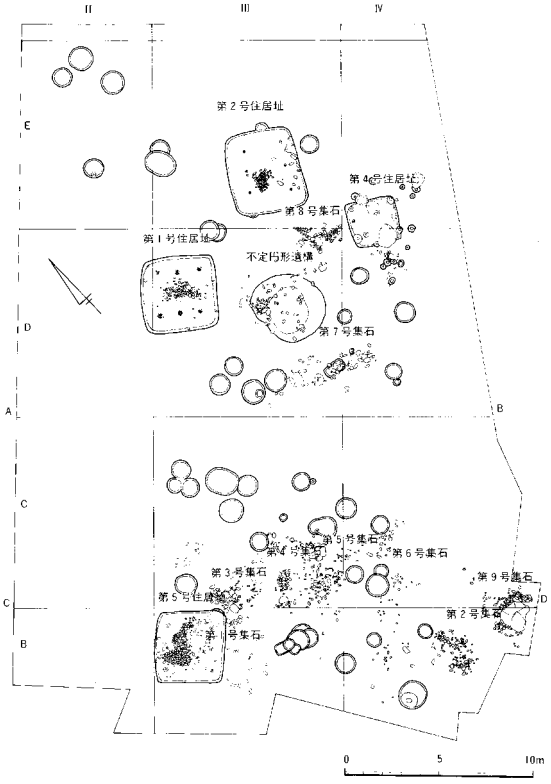
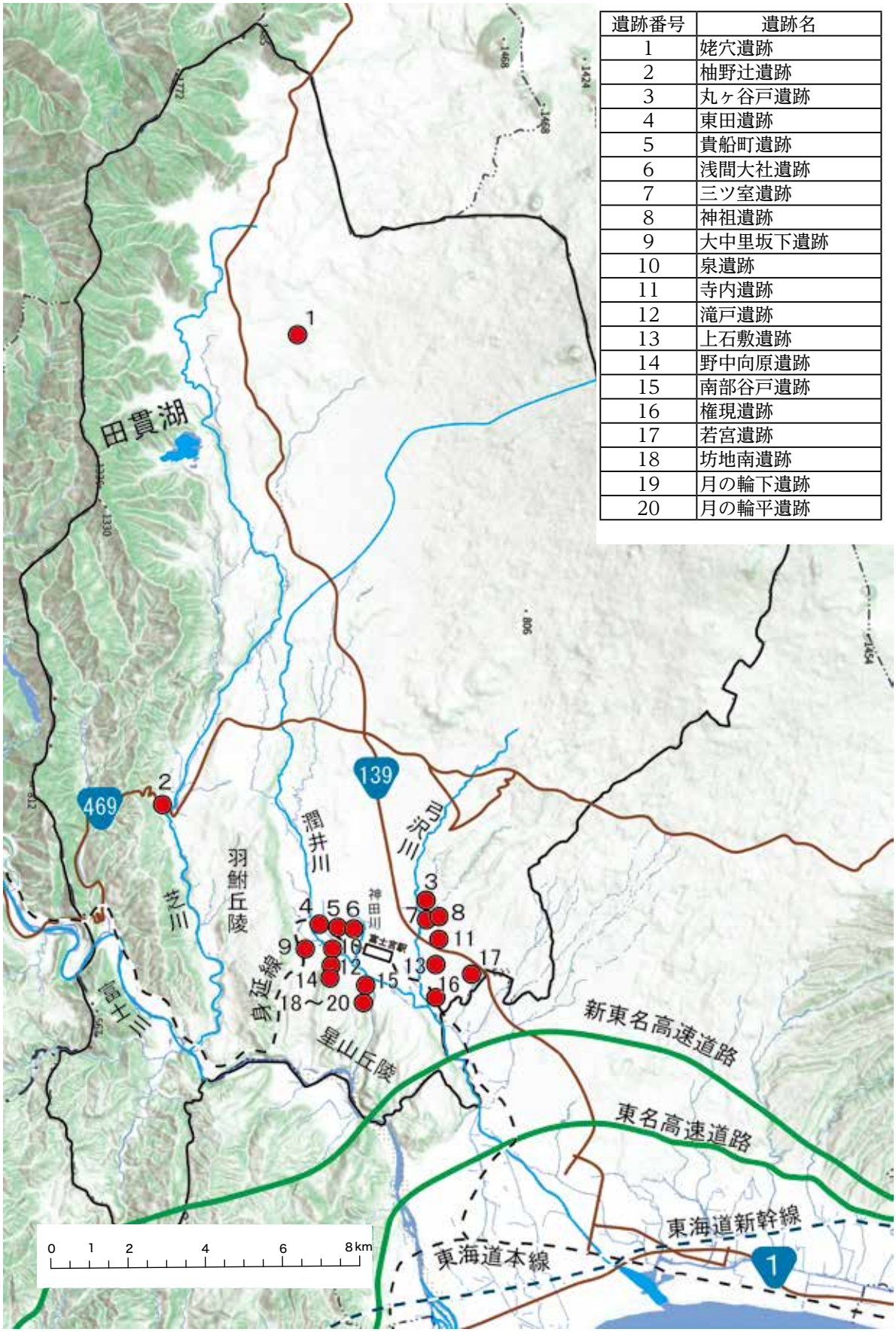


図 4-6　月の輪下遺跡平面図

図 4-5　月の輪平遺跡平面図



遺跡番号	遺跡名
1	姥穴遺跡
2	柚野辻遺跡
3	丸ヶ谷戸遺跡
4	東田遺跡
5	貴船町遺跡
6	浅間大社遺跡
7	三ツ室遺跡
8	神祖遺跡
9	大中里坂下遺跡
10	泉遺跡
11	寺内遺跡
12	滝戸遺跡
13	上石敷遺跡
14	野中向原遺跡
15	南部谷戸遺跡
16	権現遺跡
17	若宮遺跡
18	坊地南遺跡
19	月の輪下遺跡
20	月の輪平遺跡

図 4-7　富士宮市の古墳時代前期遺跡分布図（地理院地図 Vector を加工して作成）

巨岩の周辺に築かれるものなどがある。このような状況から、この遺跡は祭祀性の強い特殊な遺跡だと考えられる。

このことから、古墳時代に入る頃になると、弥生時代後期のさまざまな機能を集約していた月の輪上遺跡に対し、立地を違えて機能を分化するようになった新たな集落である月の輪平・月の輪下遺跡の登場は、新たな時代の幕開けを示している。

月の輪平・下遺跡のほか、古墳時代前期の集落として滝戸遺跡・泉遺跡・東田遺跡があげられる。

多様な生業

滝戸遺跡（図4-8、写真4-14）は星山丘陵に立地し、市立第三中学校（野中）を中心として発見されている。多くの竪穴建物や掘立柱建物のほか、方形周溝墓も多く検出されており、居住域と墓域が比較的近接した集落であったことが予想される。月の輪平・下遺跡と同じ丘陵上に立地していたことから、これらの遺跡では、畑作や狩猟採集を中心とする生業が営まれていた可能性が考えられる。

このような遺跡が確認される一方で、泉遺跡と東田遺跡は潤井川中流域に展開する沖積地内に立地している。これらの遺跡は水田を広域に形成することも可能であり、水田稲作を中心に生活を営んでいた可能性がある。

泉遺跡は四度の発掘調査により、弥生時代後期から古墳時代前期まで継続する竪穴建物跡が合計で六五軒、掘立柱建物跡が二軒、溝が三条など多くの遺構が検出されている。遺物も豊富で種類も多様である。また、他地域の型式の土器も多く、東遠江や伊勢湾沿岸地域、畿内地域のものまで出土している。

泉遺跡の北側には東田遺跡があり、ここでも古墳時代前期の集落

図 4-8　滝戸遺跡調査区

写真 4-14　滝戸遺跡出土土器

が発見されている。

両遺跡では他地域の土器が見られることから、遠方の地域とも活発に交流していた拠点的な集落であったと推測できる。

このように、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての富士宮市域の遺跡立地を概観することで、多種多様な生業や交流を垣間見ることができる。

新天地開発と地域再編

弥生時代後期から継続して古墳時代前期に集落を形成した人々がいる中、新天地へと進んだ人々の痕跡も古墳時代前期には確認できる。

弓沢川流域や小泉、大岩地区は弥生時代後期ごろの遺跡はわずかである。しかし、弥生時代終末期から古墳時代初頭になると遺跡数が急増していく。この中でも、象徴的な遺跡が大岩地区に所在する丸ヶ谷戸（まるがいと）遺跡である。

この遺跡では、大型の竪穴建物跡と前方後方型周溝墓が見つかっている（図4-9、写真4-15・16）。この竪穴建物跡の基本的な構造は、当該期に確認される建物とほとんど差異はないが、八・八m×八・二mを測る大規模なもので県内でも有数の規模を誇っている。このような大型の建物は大人数が集まり、共同体間の交流の場である可能性があり、墓前での祭祀が行われた場であったと考えられる。

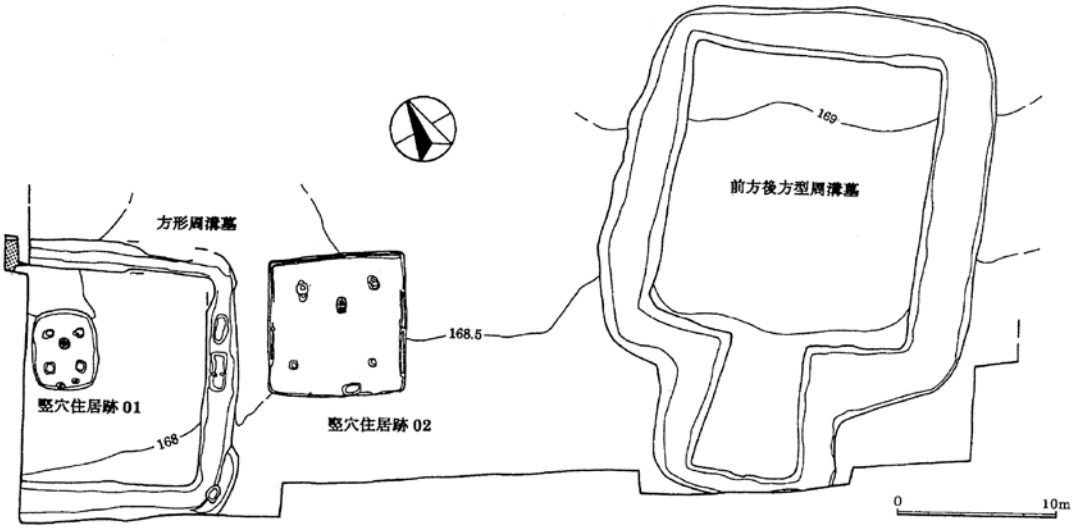


図 4-9　丸ヶ谷戸遺跡第一次調査平面図

写真 4-16　丸ヶ谷戸遺跡前方後方型周溝墓出土土器

写真 4-15　丸ヶ谷戸遺跡前方後方型周溝墓全景

前方後方型周溝墓は、弥生時代末ごろの築造と考えられる。全長約二六mを測り、その主軸を富士山に向けている。遺物は甕や壺類をはじめ、高坏などが出土している。丸ヶ谷戸遺跡は、他地域の土器の出土が目立ち、近畿・北陸・伊勢湾沿岸地域のものが確認されている。また、前方後方型周溝墓は濃尾平野地域の墓制であることから、弥生時代末ごろから古墳時代にかけて、この地に新しい文化がやってきたことを示していると考えられる。

小泉地区の神祖遺跡では、竪穴建物跡が一四軒見つかっており、その多くが重なり合って検出されたことから、複数回の建て替えが行われた大集落の可能性が考えられる（図4-10、写真4-17）。この遺跡にも丸ヶ谷戸遺跡と同様に大型の竪穴建物跡が確認されている。集落の全体像は明確になってはいないが、丸ヶ谷戸遺跡が墓域として機能していた時期には、有力な首長が住む集落であった可能性がある。

このほかに、竪穴建物七軒や区画溝一条を検出した上石敷遺跡や、棟持柱を有すると考えられる特異な建物と銅釧が発見された三ツ室遺跡などの遺跡が展開していく。

写真 4-17　神祖遺跡出土遺物

図 4-10　神祖遺跡調査区図

富士宮市指定文化財　三連甕形土器

この土器は、野中向原遺跡から出土したと伝わる土器である。口縁の部分がS字状になっていることから、S字甕と呼ばれている土器を三個連結させている。この連結部分には、孔が開けてあり、液体を注ぐと三つの甕に均等に液体が流れるようになっている。このような三個連結させた甕形土器は全国的にも非常に珍しく、ここまで完全な状態の物はほかにはないと思われる。

S字甕は煮炊きに使われる実用的な土器であるが、この土器は一般的なS字甕の三分の一程度の大きさしかなく、特別な形態をしていることから、祭祀などの特殊な用途のものであると考えられる。

非常に珍しく貴重なものとして、昭和五五年（一九八〇）に市の指定文化財に指定された。

この三連甕形土器の類例としては、神奈川県平塚市の御所ケ谷遺跡や岐阜県賀茂郡坂祝町の東野遺跡から出土している。

写真 4-19　三連甕形土器（上から）

写真 4-18　三連甕形土器（左）と通常のＳ字甕（右）

遺跡の激減と不安定な生活環境

古墳時代中期は全国的に古墳が巨大化し、古墳時代の全盛期を迎える時期である。日本一の規模を誇る大仙陵古墳（伝仁徳天皇陵、写真4-2）もこの時期である。

しかし、このような時代の中で富士宮市域の遺跡は急激に減少し、人の活動の痕跡はわずかになってしまう。

そのうちの一つとして大宮城跡（元富士大宮司館跡）がある。この遺跡は、富士山本宮浅間大社東側の小高い丘陵に位置しており、市立大宮小学校（元城町）を中心として広がっている。古墳時代中期以前の遺物としては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての物が確認されており、この頃から人々の活動があったと考えられる。しかし、竪穴建物などの遺構は確認されていない。古墳時代中期に該当する遺構は、竪穴建物跡が一八軒、土坑が二基検出されている（図4-12）。竪穴建物跡の多くに焼土が確認されることから、火災を受けた可能性がある。遺物は土師器や須恵器が出土しており、須恵器については日本列島で導入されて間もない時期のものが出土している（写真4-20）。

このほかに、浅間大社遺跡では、竪穴建物跡などの明確な遺構は検出されていないものの、古墳時代中期の遺物が出土している（写真4-21）。本殿付近では、古墳時代前期の竪穴建物跡が見つかっており、継続的に人々がこの場所を利用していたと考えられる。

富士宮市域における古墳時代中期の遺跡激減はなぜ起こったのか。答えの一つに富士山の火山活動などの自然災害が考えられる。

五世紀ごろは、富士山南西麓から山宮浅間神社の位置まで流下した青沢溶岩流を伴う噴火があったと考えられる。また、神奈川県域

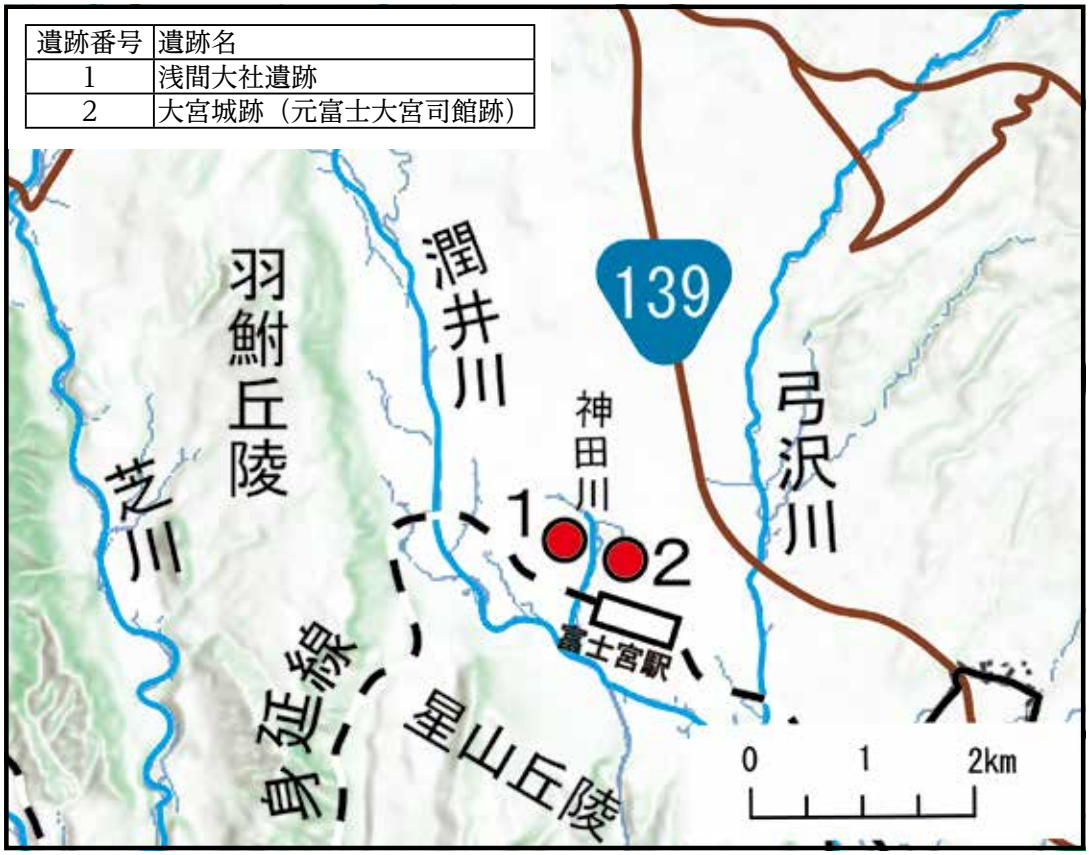


図 4-11　富士宮市の古墳時代中期遺跡分布図（地理院地図 Vector を加工して作成）

や富士市の遺跡では、遺構内にスコリアの堆積が確認され、富士山の火山活動が活発な時期であったと想定される。

また、噴火関連の災害として、河川の下流域に噴出物が溜まると河川の氾濫を引き起こすことがある。富士市沖田（おきた）遺跡では、河川の氾濫による水害が確認されており、富士宮市域でも同様の水害が起こっていた可能性が考えられる。富士宮市域における古墳時代中期は、噴火による自然災害によって不安定な状況が続き、人が住みにくい状態が続いたのではないかと想定される。

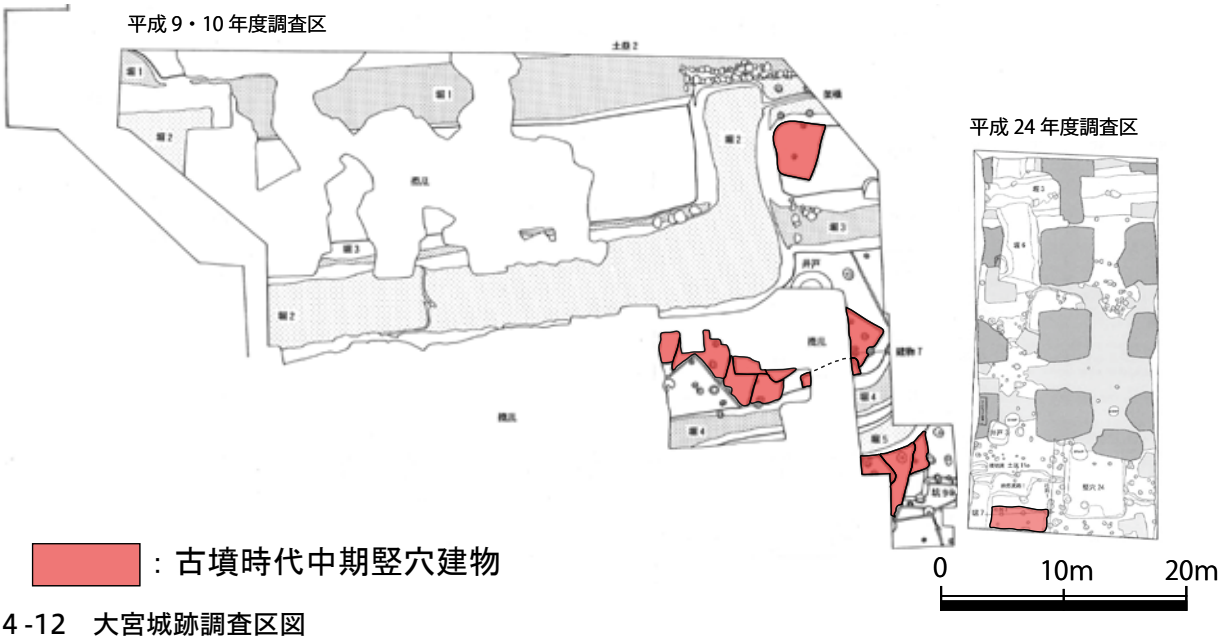


図 4 -12　大宮城跡調査区図

写真 4-21　浅間大社遺跡出土遺物

写真 4-20　大宮城跡出土遺物

集落の再増加

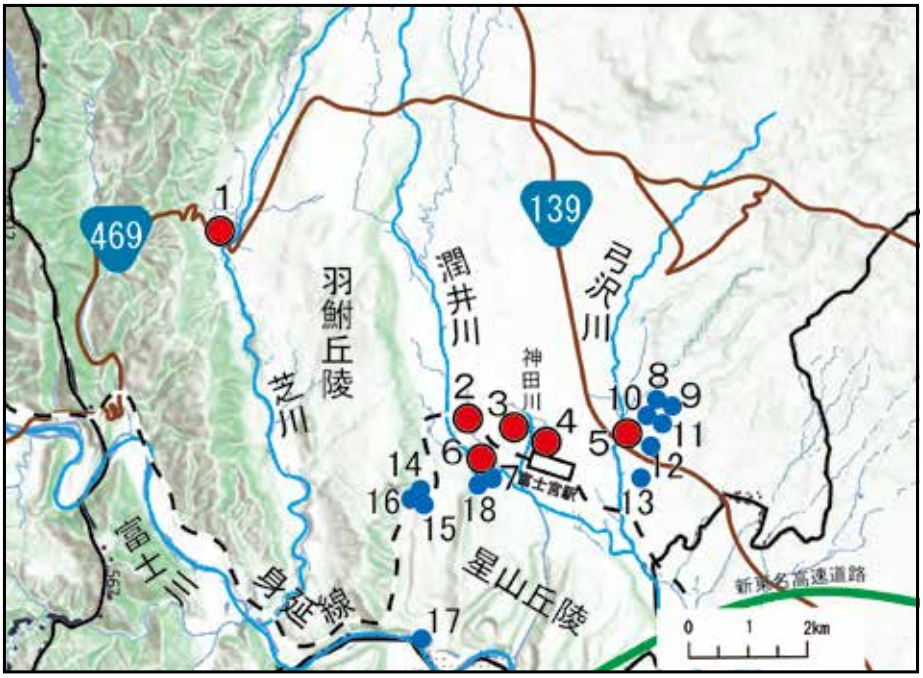
古墳時代後期には、中期から出現した神田川周辺の遺跡が継続して活動を続ける中、中期に一度途絶えてしまった潤井川流域の沖積地や柚野地区で、古墳時代前期と同じように集落や人の活動の痕跡が再度確認されるようになる。このほかに、古墳時代前期の中心地からは場所をずらすものの、弓沢川周辺でも集落が営まれるようになる。しかし、星山丘陵には集落の痕跡は確認できない。

古墳時代中期から継続して後期に集落を営んだのが大宮城跡（元富士大宮司館跡）である。検出された遺構は竪穴建物跡四軒のみで、中期に比べてその数を減らす。カマドを据えるなど構造が変化し、遺物は須恵器や土師器などが出土している。中期から集落の中心が移動している可能性もあり、今後の調査によっては古墳時代後期の集落が大規模に発見される可能性もある。

浅間大社遺跡でもわずかであるが、大宮城跡同様に古墳時代中期から継続して後期の遺物が出土しており、人々の活動がうかがえる。しかし、竪穴建物などの明確な遺構の検出には至っていない。

大宮城跡や浅間大社遺跡で集落や人々の活動が確認されている一方で、潤井川流域の沖積地では、古墳時代前期に集落が営まれていた場所で再度集落が登場する。

泉遺跡はその中の一つで、古墳時代後期～奈良・平安時代にかけて営まれた集落である。弥生時代後期～古墳時代前期にかけて集落が登場するものの、古墳時代中期に一度途絶えてしまう。しかし、古墳時代後期には再度活動が確認され、竪穴建物跡が一〇軒検出されるほか、須恵器や土師器などの遺物も出土している（図4-14、写真4-22）。



遺跡番号	遺跡名
1	柚野辻遺跡
2	東田遺跡
3	浅間大社遺跡
4	大宮城跡 (元富士大宮司館跡)
5	木ノ行寺遺跡
6	泉遺跡
7	滝戸遺跡 (SZ02・03)
8	大室古墳
9	神祖山ノ神古墳
10	神祖２号墳
11	神祖３号墳
12	寺内山ノ神古墳
13	虚空蔵社古墳
14	別所１号墳
15	別所稲荷塚古墳
16	別所蛇塚古墳
17	薮塚古墳
18	滝戸１号墳

図 4-13　富士宮市の古墳時代後期遺跡分布図（●:遺跡●:古墳、地理院地図 Vector を加工して作成）

泉遺跡の再登場に連動するように、やや北側に位置する東田遺跡も集落の活動を再開する。東田遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物跡が三軒検出されており、古墳時代後期の遺物も出土している（図4-15、写真4-23）。東田遺跡の同じ調査区では、古墳時代前期の竪穴建物跡が一〇軒見つかっているため、集落の規模が縮小、もしくはその中心地を移動している可能性が指摘できる。

東田遺跡と泉遺跡は同時期に南北に営まれていた集落であり、お互いにつながりを持ちながら拠点的な集落として活動をしていた可能性を指摘できる。

県立富士宮東高等学校（小泉）を中心として広がる木ノ行寺遺跡では、古墳時代後期の集落の一部が発見されている。竪穴建物跡が二軒見つかっているほかに、溜井と呼ばれる水を貯える施設が発見されている（写真4-24・25）。この溜井は水が湧き出す層まで掘りこんでおり、湧水のメカニズムをうまく利用した施設を作り上げている。遺物も出土しており、須恵器や土師器が出土している（写真4-26）。この遺跡はおよそ六世紀前半ごろから奈良・平安時代にかかる八世紀ごろまで継続して営まれた集落である。

前節で紹介したように、古墳時代中期には、人の活動の痕跡がほとんど確認できないまでに遺跡の数が減ってしまった富士宮市域であるが、古墳時代前期ほどのにぎわいとはいかないまでも、徐々にその生活を取り戻していった状況が遺跡の分布から読み取れる。

群集墳の造営

富士宮市域でも、古墳時代後期になると直径一〇m程の小規模な古墳が集まる群集墳が造営されるようになる。

滝戸遺跡で発見された群集墳は、富士宮市域の中でもいち早く造られたものである。滝戸遺跡は、星山丘陵の北西端部の潤井川に向

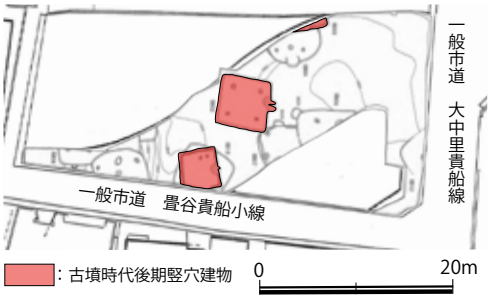


図 4-15　東田遺跡調査区図

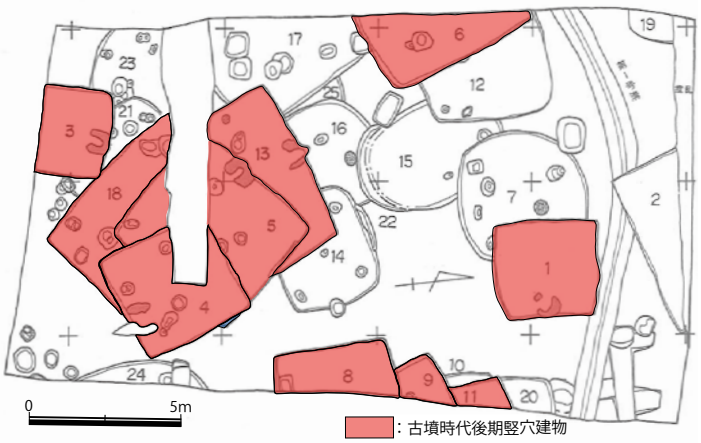


図 4-14　泉遺跡調査区図

写真 4-23　東田遺跡出土遺物

写真 4-22　泉遺跡出土遺物

かってせり出した台地に形成された遺跡であり、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代前期と連綿と人の痕跡が確認できる遺跡である。古墳時代中期の断絶の後、六世紀前半の古墳時代後期には、二基の円墳（図4-16のSZ02・SZ03）の痕跡が確認されている。両古墳共に一〇m以下の小円墳である。墳丘は後世の開発により削平を受けており、埋葬施設は残存していない。周溝のみ残存していることが確認されている。遺物はSZ02から須恵器、須恵器を模倣した土師器、剣形の石製模造品が出土している。

滝戸遺跡からやや南側には、滝戸遺跡を見下ろすように滝戸一号墳がある。この古墳は前方後円墳の可能性が指摘されており（富士宮市教育委員会　二〇〇三）、前述の滝戸遺跡の小円墳と合わせて初期的な群集墳として滝戸古墳群を形成していたと考えられる。

時代がやや進み、六世紀後半から七世紀ごろになると弓沢川流域や安居山、沼久保に古墳の築造が認められるようになる。

弓沢川周辺の古墳は、市の指定史跡に指定されている大室古墳や虚空蔵社古墳を始めとして、神祖山ノ神古墳・神祖二号墳・神祖三号墳・寺内山ノ神古墳があり、この時期に古墳の築造が増加する。いずれも一〇m前後の小円墳であり典型的な古墳時代後期の古墳である。時期は六世紀から七世紀ごろにかけてのものと考えられ、横穴式石室の採用が認められる。

安居山では、太刀や馬具、玉類が多く出土した別所一号墳や別所稲荷塚古墳、別所蛇塚古墳の別所古墳群が造営される。こちらの古墳も前述した弓沢川流域の古墳同様に、一〇m前後の小円墳で六世紀後半から七世紀ごろの築造であると考えられる。

沼久保の薮塚古墳は、後世の開発により消滅してしまい詳細な情報は多くないが、土師器の坏が見つかっている。

いずれの古墳も巨大なものではないが、滝戸古墳群を皮切りに、

写真 4-24　木ノ行寺遺跡竪穴建物跡

写真 4-26　木ノ行寺遺跡出土遺物

写真 4-25　木ノ行寺遺跡溜井跡

富士宮市域では古墳の築造が行われていく。

地域の再興と古墳時代の終焉

以上のように、富士宮市域では古墳時代後期から古墳の築造が盛んになる。いち早く古墳を造営し、滝戸古墳群を形成した集団は、古墳時代中期から集落を形成してきた大宮城跡や浅間大社遺跡の人々の首長である可能性がある。この時期に潤井川流域を再開発し、その後徐々に人々の活動が再開していくきっかけになったのではないだろうか。

その後、木ノ行寺遺跡の出現と連動するように周囲に古墳が造られる。同様に泉遺跡・東田遺跡の出現とともに別所古墳群も形成される。古墳時代中期に激減した生活領域を古墳時代後期には再興していった状況が垣間見える。

八世紀には、全国的な流れに従うように富士宮市域での古墳の築造は終焉を迎える。この時期には、富士市域で富士郡衙とされる東平遺跡がすでに営まれていたと考えられる。この遺跡は、多くの竪穴建物跡などが発見されている大規模集落である。八世紀においては、律令制の施行とともに富士郡の政治を行う場や寺院、集落が存在したと想定され、富士・富士宮市域にも律令制の時代が到来したことを示している。

写真 4-28　大室古墳

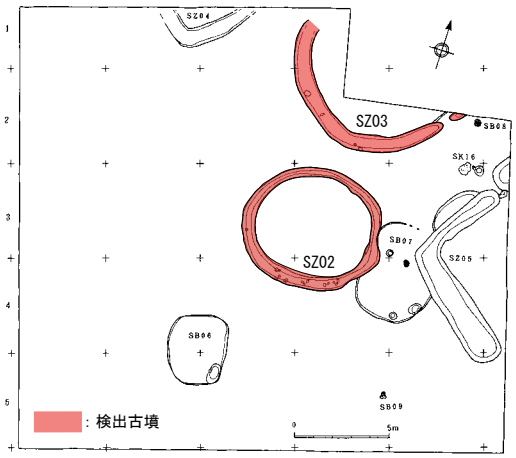


図 4-16　滝戸遺跡検出古墳（SZ02・SZ03）

写真 4-29　大室古墳出土遺物

写真 4-27　滝戸遺跡 SZ02 出土遺物

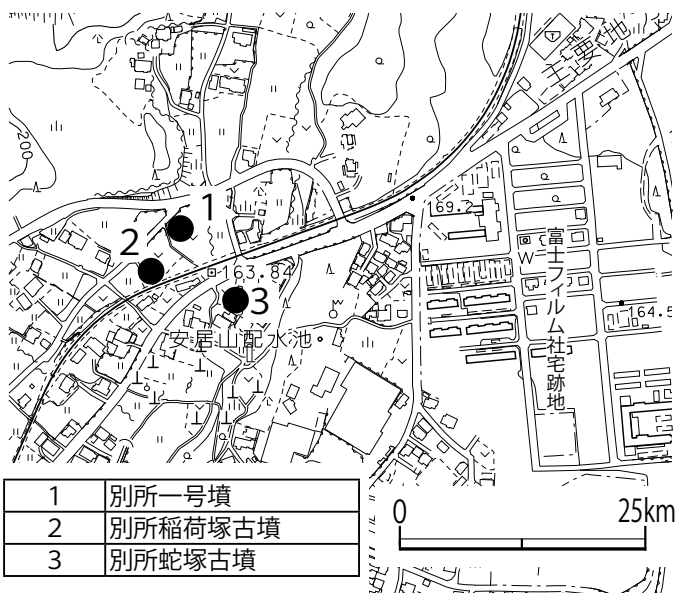
別所一号墳出土資料

別所一号墳は市内安居山に所在しており、別所稲荷塚古墳と別所蛇塚古墳ともに小規模な群集墳を形成している。

学術的な発掘ではないものの、明治三五年（一九〇二）に身延線の開発にともない発掘された。古墳の内部からは、長さ二・七m、高さ一・六m、幅〇・九mの石室が検出され、この石室から、刀身三振、これら刀の鍔や柄頭などの刀装具、鉄鏃や鉄鏃の塊、馬具、装身具などが出土した。銀による象嵌で模様が施された鍔や金銅装の馬具や刀装具といった優品が多く、古墳に埋葬された人物はランクの高い人物である可能性が高い。

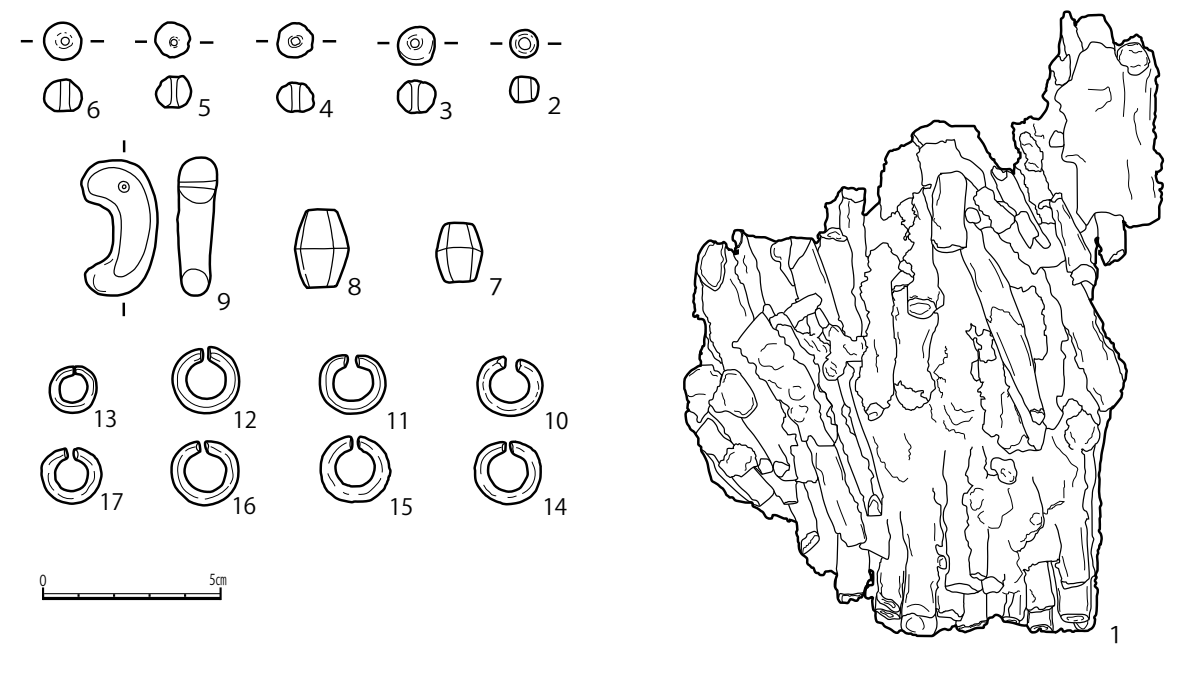
出土品からこの古墳の時期は六世紀の終わりから七世紀頃であると考えられる。

出土品は東京帝室博物館（現東京国立博物館）に預けられ、現在も保管されている。



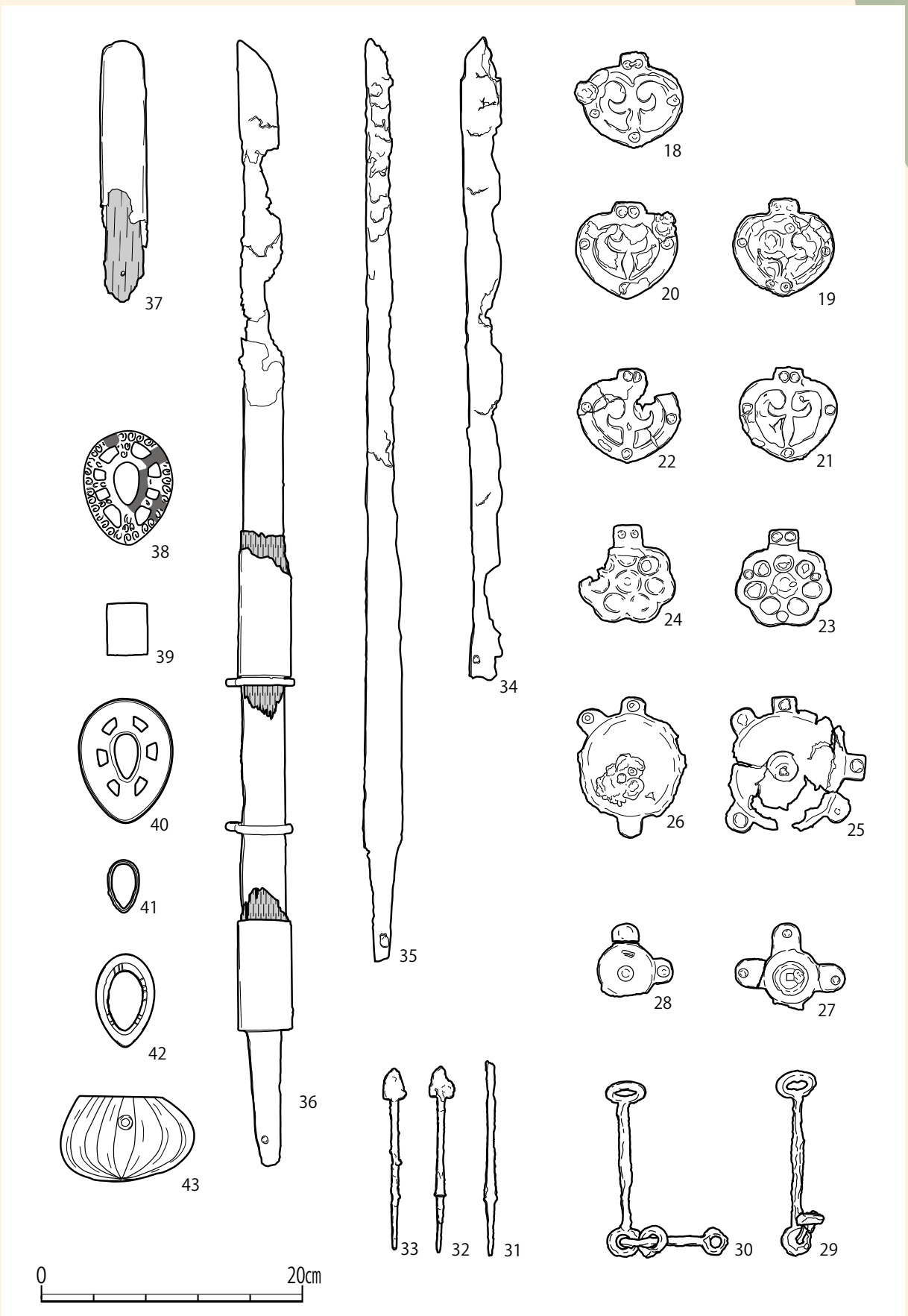
1	別所一号墳
2	別所稲荷塚古墳
3	別所蛇塚古墳

図４-17　別所古墳群分布図



1. 鉄鏃（塊）2. 石製丸玉 3～6. ガラス製丸玉 7・8. 切子玉 9. 勾玉 10～17. 耳環 18～22. 心葉形杏葉 23・24. 花形杏葉 25・26. 雲珠 27・28 辻金具 29・30. 轡 31～33. 鉄鏃 34～36. 刀身 37. 鞘（先端部）38. 八窓透鍔（銀象嵌）39. 鏃（ハバキ）40. 六窓透鍔 41. 柄縁金具 42. 柄金具 43. 柄頭

図 4-18　別所一号墳出土遺物


37
38
39
40
41
42
43
36
35
34
18
20
19
22
21
24
23
26
25
28
27
33
32
31
30
29
0
20cm